
BHT ~ 隻眼の天使 ~

高橋 A 全

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BHT 〈隻眼の天使〉

【Nコード】

N9657Z

【作者名】

高橋A全

【あらすじ】

家族をうしなつて行き場をなくした少女は、資産家の令嬢のご厚意で、メイドとして働かせてもらえることになった。忙しくも心休まる日々が続いたが、それもつかの間のこと、大恩あるお嬢さまに危機が迫ると知らされる。なんとかしようと思惑する少女の前に、凄腕のメイドがやってきて……。

むらむらしているBと、よたよたしているHTが繰り広げる、まったりとしたメイド系コメディー！。

ブログ（前書き）

<注意喚起>

コメディー要素は割と弱めだと思われます。

ですが、ジャンル分けで他に該当するものはありません。

結果としてコメディーで投稿しております。

お読みになる前に、その点をご了承ください。

プロローグ

大好きだった、お父さんが、死んだ。

突然あらわれたのは、黒づくめの男のひとたち。

「遺体の確認をしてもらいたい」

それが、彼らの言い分だった。その口調はきわめて事務的で、感情というものを感じさせることがなかった。だから、わたしも何も感じることはなかった。

これは夢か何かで、現実ではない、わたしはそんな風にしか感じていなかった。

彼らに連れられて霊安室へと向かう最中も、わたしはずっとふわふわとした非現実的な感覚に支配されていた。

暗い部屋。

寒い部屋。

狭い部屋。

白い布がめくられて、白い肉体があらわになる。

見慣れない顔。まるで違う顔。

お父さんはこんな顔をしていない。そう思ったから、別人だ、としか思えなかった。

そのひとのほほに、触れてみた。

ぐにやぐにやとした、奇妙な感触。やっぱりちがうひとだ、とわたしは感じていた。

「これなら大丈夫じゃないか」

男のひとがつぶやく。

わたしに聞こえないようにして、ひそひそと会話がかわされた後で、別の男のひとが、ささやくように言った。

「写真を見ますか？ 無理に、とは言いませんが」

口調とは裏腹に、その表情と声は、強制的だったように記憶して

いる。

差し出される写真に、目を落とした。

上の方からぶら下がった縄。その縄が巻きついて首。だらりと垂れ下がった体。

わたしの視線が、遺体の顔へと固定される。突き出そうになっている眼球。実際に突き出されている舌。紫色になっている顔の皮膚。それは、今まで見たニンゲンの顔の中で、いちばんひどいものだったけれども、わたしには分かった。わたしには分かってしまった。写真にうつる、天井からぶら下がった物体が、まさにお父さんである、と認識された瞬間、わたしの中で何かはじけた。

壊れて、砕けて、爆発した。

視界がぐにやりと歪んで、とめどなく何かがからだの内側からあふれだしてきた。黒ずくめの男たちがしきりに何かを口にしていたが、わたしには何も聞こえなかった。まるで超大型の台風のようなすさまじいまでの何かがかがわたしの中で荒れ狂っていた。

大好きだったお父さん、優しくったお父さん。いつもわたしの味方だったお父さん。

お父さんの笑顔が、永遠に続くかと思われるほど何回も、繰り返したわたしの目の裏に、スライド写真のように映し出された。

気がついたとき、わたしはソファアの上に寝かされていた。

「やっぱり見せない方がよかったかな」

男のひとたちの会話がぼそぼそと聞こえてくる。

はつきりと覚えているのは、そこまでだった。

この後のわたしの記憶は途切れ途切れになっていて、まるでテレビのチャンネルを頻繁に変えたときのように、飛び飛びになっている。何度も耳にしたのは、

「ご親戚は？」

という言葉だった。わたしは首を横に振ることしかできなかった。お父さんが勤めていた会社の方でも、親族の連絡先は知らなかったらしい。後になってから知ったことだけど、お父さんは結婚する

ときに親族と大喧嘩をしまい、親戚一同から絶縁されていたよ
うなのだ。

お母さんはすでに亡く、ただひとりの家族であったお父さんが自
殺してしまっただけ、わたしはひとりきりだった。ときおり、中学
校の担任の男の先生が、困ったような顔で付き添ってくれているだ
けだった。

お父さんのお葬式のこととか、お墓のこととか、そんなことを聞
かれても、わたしには分からなかった。まして、お父さんが管理し
ていたお金のことなんて何も知らなかった。

ゾウワイとか、オウリヨウとか、そんなものは、わたしは理解で
きなかった。

カタクソウサクと一方的に言われて、自宅は乱暴なひとたちによ
って踏み荒らされた。

「お父さんは、そんな悪いことはしていません」

そうつぶやいて、わたしはただうつつむくことしかできなかった。

大家さんは、「今すぐにも出ていってほしい」と、言った。

わたしが首を振ると、「さすがに犯罪者の娘は恥知らずだ」と、
怒鳴られた。

どうしたらいいのか分からなかった。

大家さんだけではなく、マスコミだと名乗る人たちも、家にやつ
てきた。電話や玄関のベルが鳴り続けて、わたしはおふとんの中
でずっと震えていた。

お父さんの遺品をかたづけようとしても、思い出すのが怖くてさ
われなかった。

わたしは、家の外へと逃げた。明日のことはもちろん、今日のこ
とすら考えることができないままに、わたしは公園のブランコに、
ひとり座り込んでいた。

とにかく、わたしはお父さんに会いたかった。

泣きそうになって、何度もそれを我慢した。

『わたしは泣かない』

それは、お母さんが死んだときに、お父さんと約束したことだった。

お父さんが死んでしまった今となっては、約束だけでも守らなければならなかった。

こぼれそうになる涙と戦い続けるうちに、あたりは暗くなり始めていた。どうすることもできないままに、わたしが顔をあげたときのこと。

音もなく、一台の真っ赤な車が公園の入り口に止まった。

大きくて、すごく高そうな車だった。スーツ姿に制帽をかぶり、丸メガネをかけた若い女性が、運転席から降りてくると、後部座席のドアをうやうやしく開けた。

そのときのことを、わたしは今でもはっきりと覚えている。

運転手の女性が差し出した手に、みずからの白い手を重ねた人物が、ゆっくりと落ち着いた動作で大地に降り立った。

舞い降りた、といった方が正しかったかもしれない。

車から現れたのは、ひとりの女のひと。

流れるような美しい長い髪。すらりとした長身。抜けるように白いその肌。一流の彫刻家がつくりあげたかのような、完璧な顔立ち。左目に、なぜか白い眼帯をつけていたが、それすらも神々しい装飾品にしか見えなかった。

わたしの目は、吸い寄せられるようにその女のひとに釘付けになった。

わたしは、天使に会った。

その女のひとの背中に、白い羽が生えていないのがとても不思議だった。

その天使さまがわたしの方へと、ゆっくりと近づいてくる。

心臓が、ばくばくと高鳴るのがわかった。呆然と、いや陶然として眺めるだけのわたしの前で、天使さまが足を止めた。レースの手

袋に包まれた手が、わたしに差し出される。

「さあ、いらっしやい」

言われるがまま、わたしは、うやうやしく天使さまの手をとった。

「おーい雪ん子、どうだい？　だいぶ、慣れてきたんじゃないの？」

わたしは、背後から声をかけられて振り返った。声の主を確認すると、目線を上の方に向ける。そのひと、清水拭乃さんは、わたしよりも頭ひとつ以上も背が高いからだ。

「えと、そう、ですね。慣れてきた感じはします、よ？　でも、まだ皆さんにご迷惑をかけてばかり、ですけど……」すこし考えたあとで、正直に答える。

「いや、そんなことはないぜ。けっこう助かってるよ」わたしと同じメイド服を着ている拭乃さんは、手にしていたモップの柄をくるくると手の中で回すと、ニツ、という感じで笑顔を見せた。「たしか……そろそろ三週間になるんだっけか？」

「えと、そうです。ここにきて二十日目になりますから」わたしは両手の指を折った。

「数えてるのが、雪ん子らしいぜ」

拭乃さんは、けらけらと笑った。その笑顔は、長身や短髪とあいまって、ボーイッシュな印象を強く受ける。とつてもカッコいい。もし、わたしが通う中学校に在籍していたら、むしろ女の子からのラブレターをいっぱいもらいそうな、そんな感じの女性だ。

その拭乃さんが、いじわるそうなのに、不思議と魅力的な笑顔で言う。

「そうだ、あと十日したら、一ヶ月記念、ってことで、みんなでお祝いでもするか？」

「え、え……そ、そんなのいりませんよお」

顔が、すこし赤くなるのがわかった。拭乃さんはわたしのことをからかっているのだ。それくらいのこととはわかる。

わたしはゴミ袋の口を結びながら、照れかくしのために笑って訊

いた。

「つぎ、何をしましょう、か？」

拭乃さんは、もう一度モップをくるくると回した。「そうだなあ、掃除はもういいから、菜花を手伝ってくれるか？」

「はい、わかりました」わたしは、ペコリと頭を下げた。

わたしが、ここのお屋敷にお世話になるようになってから、そろそろ三週間になる。

天使のお嬢さまから『自分のメイドになってほしい』と言われ、はじめはただビックリした。そもそも、あまりにも唐突なお話であったし、くわえて、メイドさんなるものが、どんなものなのか、わたしにはよくわからなかったからだ。

それでも、何しろわたしには行くあてがなかったし、生活のあてもなかったから、とにかく話を聞くだけでもよいかな、と思ってお屋敷にやってきたのだった。

そこで、いきなりメイド服に着替えさせられてしまった。

わたしがおろおろしているあいだに、こまごまとしたことは、すべて処理されたみたいだった。家にあつたはずの、わたしの私物とお父さんの遺品は、いつの間にやらお屋敷に運び込まれていたし、賃貸物件だったおうちの退去手続きも終わっていたのだ。

呆然としていた時間が過ぎたあとで、わたしは冷静さを取り戻した、つもりだった。

いくらなんでもさすがにこれは、と思つて、あわてて部屋から廊下へと出たところで、天使のお嬢さまに出くわした。

「これから、よろしくお願いね」

極上の、天使さまの微笑みが、まさに目の前にあつた。

気がついたとき、わたしは自然な動作でうなずいてしまっていた。そのあと、冷泉添華さん　このひとはお嬢さまの秘書だ　と　　という、黒っぽい色あいのスーツを着た、クールな感じの女のひとが、別室で色々と説明してくれた。

この大内家は、かなりの資産家であること。

大内家が所有している会社も、いっぱいあること。

わたしのお父さんは、そんな会社のひとつで働いていたこと。

お父さんと、天使のお嬢さまには、わずかだが面識があったこと。何かあったとき、娘の小雪のことをお願いします、とお父さんから頼まれていたこと。

「幸いにも、夏休みに入ったばかりです。さまざまなのが落ち着くまで、このお屋敷にいた方が良いと思います」

添華さんの口調は沈着で、説明は的確だった。とてもたくさんの情報を、頭の中で整理するのにすこし時間がかかってしまったけれども、最後にわたしは同意した。

「とりあえず、夏休みが終わるまで、お世話になります」

そう言って、わたしは頭を深く下げた。

そのとき、『夏休みになったら、一緒にディズニーランドに行こう』というお父さんとの約束が、永遠にお流れになったことを、わたしは思い出していた。

お父さんが死んだ、ということを知り、わたしはあらためて実感していた。

涙をこらえるのに、ちよっぴり努力が必要だった。

『菜花を手伝ってくれるか?』

と、清水拭乃さんに言われて、わたしが向かった先はお台所だった。

鍋島菜花さんは、お屋敷のお料理全般を担当しているメイドさんである。

まだ二十歳かそこらなのに、和食・洋食・中華にデザートと、ひとりでなんでも作れてしまう名コックさんなのだ。

菜花さんを手伝うということは、お料理を手伝うということである。菜花さんの腕前を近くで見られるので、わたしにとっても色々勉強になることが多いし、何よりわたしもお料理が好きだから、お手伝いをするのが一番好きだった。

「菜花さん、失礼します、よ?」わたしはペコリと頭をさげる。

ふたつのおさげを揺らして、菜花さんが振り向いた。「あ、こゆちゃん、いらっしやい」

「あの、拭乃さんに言われて、お手伝いを」

「あら、ありがとうね」菜花さんが、にっこりと微笑んだあと、ふちの太いメガネの奥の両眼を天井に向けて、すこし考え込んだ。

「うーんと、じゃあ、そこのおじやがの皮を、しゅるしゅるとむいてくれる?」

「はい、わかりました」

わたしは、水洗いされてざるに載っていたじゃがいもを取りあげると、用意されていたピーラーで皮をむいていった。結構な量のじゃがいもなので、丁寧かつ手早く作業しなければならぬ。

量が多いのには、理由がある。

いま、このお屋敷には、わたしたちメイドさんを含めて八人がいるのだ。お嬢さまのお食事は、菜花さんが最初から最後まで腕によりをかけるので別格としても、まかないだけでも七人分つくらない

といけない。つまり、わたしの目の前にあるのは、のこる七人分のじやがいもということになる。

ピーラーで大まかに皮をむくと、わたしは包丁に持ちかえた。刃の角のところを使い、芽の部分を取り除いていく。ここを丁寧にやらないと、おいもの大きさがどんどん小さくなってしまつので、わたしはすこし緊張した。

菜花さんがにつこりと笑った。「やつぱりこゆちゃんは上手ね。たすかるわ」

「え、え……そ、そんなことないです、よ？」ちよっぴり顔が赤くなる。

「でもねえ、前にふきちちゃんに手伝ってもらったときは、おじやがが立方体になつてたわ」

「拭乃さん、お料理苦手なんです、か？ お掃除はあんなに得意なのに」

「苦手というか、あまり好きじゃないみたいなの。清掃員じゃなくてメイドなんだから、仕事に好き嫌いはダメよ、って言うてはいるんだけどね」

「はあ、なるほど」そう応じながら、わたしはメイドさんについて考えていた。

このお屋敷にいるひとたちは、メイドという呼び方をしているけど、実際のところ、ふつうの家事手伝いと変わらないのかな、とわたしは感じていた。しいて言えば、服装がメイド服というだけのことである。

わたしは父子家庭で育ったけど、お父さんはお世辞にも家事が得意とは言えなかった。わたしは小さいころから、お母さんの代わりに家事全般をやっていたので、得意とはいえないにせよ、ほとんどの家事には慣れていた。

だから、菜花さんが言ったことは、正しいのだ、とわたしは思った。

わたしなんかでさえ、ひととおりはそれなりにできる。だから、

家事というのは才能の有無はあまり関係なくて、慣れていくかどうか大きいのだと思えた。菜花さんの『好き嫌いはダメ』というのは、たぶんそういう意味なのだ、と思う。

じゃがいもの皮むきが終わると、今度はにんじんを手を取った。同じようにピーラーで皮をむく作業に専念する。あつちのボールに玉ねぎがあるのを見ると、どうやら今夜のまかないはカレーライスではないか、とわたしは判断した。

すると、お嬢さまのお夕食はポトフかな、とわたしは想像した。

お嬢さまがカレーということはあり得ないからだ。別に、カレーがお嫌いということではない。刺激の強いものは食べてはいけならしい、のだ。詳しい理由は知らない。

詳しい理由は、知ってはいけない。

『お嬢さまのプライベートに関しては、あまり訊いてはいけない』
お屋敷の中には、そういう空気が漂っている。

そのことは、ここに来てまもないわたしにも、わかっていた。そういう微妙な空気を読み取る力は、お父さんの事件があったから、だいぶん上達したのではないか、とわたしは感じていた。原因といい経緯といい、結果に自信をもってよいことなのかどうか、わからないけれども。

にんじんの皮をむきおわって、わたしは玉ねぎをチラリと見た。たぶんつきは、あれをきざまないといけないのだと思うけど、正直なところ目が痛くなるのはつらい。こういうときは、メガネをかけている菜花さんが、すこしうらやましくなる。

そんなとき、台所の外の方から、ピーピーという機械音が聞こえてきた。

「あ、お洗濯が終わったみたいだから、るるちゃんのところに行ってあげて」

「はい、わかりました」

内心で胸をなでおろし、玉ねぎにバイバイをすると、わたしはペコリと頭をさげた。

わたしがサンダルに履きかえて、中庭に出たところで、洗濯かごを両手で抱えている、河野流瑠ちゃんと出くわした。

「あ、流瑠ちゃん、お手伝いに来たよ」

「おっ、サンキュー、ゆっきー。ちょうどいま、脱水がおわったところだよん」

流瑠ちゃんはウインクしてみせると、ショートカットの髪を揺らし、ニカツと笑った。流瑠ちゃんはいつも元気いっぱい、一緒にいると、わたしも元気になるように思えて、ちょっぴり嬉しくなる。流瑠ちゃんは、わたしと年がひとつしか変わらない。

つまり、中学三年生のはずで、そんな若さでこのお屋敷に住み込みで働いている。何があつたのか、わたしはもちろん訊かなかつたし、流瑠ちゃんの方も、わたしに何があつたのか、たずねることはなかった。

だけど、なんとなくだけど、心の奥底の方では通じるものがあるのではないか、とわたしは感じている（一方的にだけ）。流瑠ちゃんの方が年上だし、メイドさんとしても先輩だけど、『ちゃん』付けで呼ぶことを許してくれたし、わたしもそれに甘えていた。

「よっ、こら、せつと」

「よいしょ、つと」

ふたりに掛け声を合わせて、お洗濯ものを運んでいく。行く先は二階にある、乾燥専用のお部屋だった。

わたしはこのお屋敷にくるまで知らなかったのだけど、こういう高級住宅街では、お洗濯ものを外に干してはいけない、のだそうである。

景観上の問題らしいのだけど、お洗濯ものをおひさまの下で干せないのは、何となく残念になる。さすがに、シーツとかタオルとかは乾燥器にかけるけど、こまこまとしたものや、痛みやすいものは

室内に陰干しすることになる。お部屋を暖気して、換気することで乾かすのだ。

じつは、このお洗濯と乾燥が、かなりの重労働である。お掃除やお料理にくらべると、体力の消耗がはげしい。気がついたときにはふうふうと汗をかくことになる。それでもこれが終われば、ちよつとひと休みできるのだ。

お掃除、お料理、お洗濯。

こうやって、色々と体を動かしていると、思っているよりも時間がたつのが早い。

この一ヶ月ほどは、わたしの生活はこんな感じだ。お屋敷にいるメイドさんたちの、誰かしらのお仕事をお手伝いしているのだ。

もちろん、お手伝いできないものもある。

たとえば、メイドの安国寺智恵さん。このひとは事務処理を担当していて、しかもお嬢さまの家庭教師的な立場を兼任している。

なので、智恵さんではなくて、智恵先生とお呼びすることが多いのだけど、このひとのお仕事はお手伝いできない。事務として扱っている書類には、ときとしてマル秘な内容のものも含まれるからだ。むしろ逆に、

『安国寺さんのお部屋には、勝手にはいらないように』

と、秘書の冷泉添華さんからきびしく言われているくらいだ。部屋の前に出してある、シュレッダーされた書類のゴミを片付けるくらいは、許されているけど。

あとは、丸目輪さんのお仕事も、わたしではちよつとお手伝いできない。そもそも、輪さんはメイドさんではなくて、運転手さんである。あるとき公園に止まった、真っ赤な高級車（お嬢さまの専用車だ！）を運転するのが、まさに輪さんの仕事なのだ。

しかも運転するだけではなくて、車の整備も自分でやっている。さらに整備できるのは車だけではなく、機械全般におよぶ。おつきなどところでは電動式の扉とか、業務用だと思われる大きさの冷蔵庫や洗濯機など。ちっちゃなところではパソコンやマシンはもちろ

ん、腕時計の修理までなんでもござれなのだ。

女の子で、しかもまだ十代なのに、輪さんは機械にめっぽう強い。自慢ではないけど、わたしなんかは、ビデオの予約録画の操作にも自信がない。機械はダメ。だから、輪さんのお仕事はお手伝いできないのだ。なんか、わたしが触ると、機械が色々壊れてしまいうな気さえするし。

あとは言うまでもないけど、秘書をされている添華さんのお手伝いなんかは、とんでもないことなので、とても無理なお話だった。だから、わたしができるお手伝いは、次のみっつ。

清水拭乃さんのお掃除。鍋島菜花さんのお料理、河野流瑠ちゃんのお洗濯。

たったそれだけのことだったけど、みなさんのお仕事をお手伝いしていると、けっこう忙しい。なので、余計なことを考えずに済むのが良い。

心が苦しいときには、へとへとになるまで体を動かしてしまえば、すこしは楽になる。

これは、このお屋敷に来てから学んだことだった。

すくなくとも、何も考えずに、ぐっすりと眠ることができる。

それが、その場しのぎの逃げにすぎないとわかっていても、いまのわたしにとっては、とても大事なことであるかのように、思えるのだった。

それから、しばらくたってからのこと。

鍋島菜花さんが、やかんを火にかけて言った。「じゃあ、すこし休憩にしましょうか」

「輪さんもお呼びします、か？」わたしは、拭き掃除の手を止めて訊いた。

あいかわらず、モップをくるくる回している清水拭乃さんが応じる。「ああ、頼むぜ」

「あ、じゃあ、わたしが呼んできます、ね」わたしはふきんを流しのそばにおくと、駐車場の方へと足をむける。

菜花さんが休憩を提案した、ということとは、それはつまり、お嬢さまたちが休憩をとった、ということなんだと、最近わかってきた。菜花さんがお嬢さまのお部屋にお茶を運んだあとで、わたしたちもお茶をいただく、という流れになっている。つまり、お嬢さまとわたしたちが同時にお休みを取るわけで、そうすることで、わたしたちが休んでいる間に、急に呼びつけられてお仕事を任される事態が起こりにくくなるのだ。

そういうのは、メイドさんとしての知恵なのかな、と思う。菜花さんは、高校を卒業してからこのお仕事についてたこのことなので、まだ二年かそこらしかたっていないと思うけれども、このあたりの気の使い方はすごく上手だと思う。きっと、もともとそういう心配りができるひとなのだろう。

さて、駐車場についたところで、わたしは周囲を見渡して、丸目輪さんの姿を探した。

いつもだっいたらこのあたりで、お嬢さま専用の真っ赤な高級車を、整備しているはずのだけど……。

「あれ、れ？」わたしはびっくりして、思わず声をあげた。

手に付いた油汚れを拭き取りながら、輪さんが姿をあらわす。「

「おや、ゆきちちゃん、どうしたスか？」

「あ、えと、輪さん、いま、お茶が入るので、お呼びしようかと思っただんですけど……」

わたしは、あとに続く言葉を飲み込んだ。

前にも言ったけど、お嬢さまに関する事は、訊いてはいけないことになっている。

くわえて、わたし自身がただの使用人、という立場である以上はお嬢さまとの関係の有無にかかわらず、あまり興味本位で余計な質問をしないように、そんなスタンスでいるように、と冷泉添華さんや拭乃さんから強い口調で教わっていた。

わたしは、そのお話は当然のことだと思った。

もちろん、お世話になってる身だ、ということもあるし、このお屋敷ではいちばんの新米だ、ということもあるけど、それら以上に理解できる部分もある。

というのは、わたし自身が、逆の立場というものを経験していたからだ。

お父さんの事件があって、マスコミのひとたちは、『知る権利』なるものをふりかざし、あらゆる意味で一方的な質問を、わたしに嫌というほどあびせかけてきた。

興味本位の余計な質問というものが、どれほどひとを傷つけるのか、わたしはわかってはいるつもりだった。

だから今だって、のどまで出かけた言葉を、ごっくんしてがまんした。

どんなに知りたいからといって、簡単に訊いてよい、というものではないのだ。

そんなわたしの内心を、輪さんは表情から読み取ったのかもしれない。トレードマークになっている丸メガネの位置を直すと、輪さんの方から話題をふってくれた。

「お嬢さまの専用車が、いつの間にか二台になってるから、ピックアップしたスか？」

「え、え……まあ……そ、そんなところですよ」

顔のわりに大きな丸メガネの奥で、輪さんの目が笑っていた。「そんなにおっかなびっくりでなくても良いですよ、別に秘密っていうわけじゃないですから」

「よかったです、よ？ それを聞いて、とっても安心しました」

「で、どうですか？ ゆきちちゃん」

「どう、とは？」

「この二台、同じものに見えるですか？」

一瞬、輪さんの質問の意味がよく分からなかった。けれども、わたしはちよびり考えたあとで、二台の真っ赤な高級車を見比べて、正直に答えた。

「そう、ですね。ナンバープレート以外、同じように見えます、よね？」

「よし、それならオツケえな。じゃあ、お茶をいただきにいくからね」

わたしの頭には、まだハテナマークが点灯していたけれども、輪さんの方がすぐに話題を変えてしまった。

「ところで、洗濯機の調子はどうですか？」

「あ、それなら、流瑠ちゃんが調子良いって言ってましたよ。すごく喜んでました」

「そっすか。でもあれ、年代物スから。私がしたのは応急処置スから、そのうちまた調子悪くなるかもスね。早めに業者さんをお呼びの方が良いかもスよ」

「年代物ということとは、かなり古いものなんですよ、か？」

「お嬢さまが生まれた年に買ったみたいスな」

「それは……」と言いかけて、わたしは言葉につまった。ここで古いとか年代物とか言うのと、間違いなくお嬢さまに非礼であるにちがいないからだ。

そんな、ときまぎしているわたしの様子を見て、輪さんはニヤリと笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9657z/>

BHT ~ 隻眼の天使 ~

2012年1月4日03時19分発行